

にゃんこシッター

## 1 出会いは衝撃とともに

あー、参った。まさかあんなミスをしてかすとは……

金曜日の午後八時。会社のエントランスを出た中野真優は、疲れの滲んだため息をついた。

というのは、週明けの会議で使う資料を作成し、最終チェックをしていたら……なんと、数字ばかりが並んでいるページに『もやし』の三文字があつたのだ。

実は昨日、仕事帰りにスーパーに寄つたら、もやしが三袋で三十円という破格の安値で売っていたので、真優は九袋も買い込んでしまつた。シャキシャキしているうちに食べなきやと思つて、もやしを使った料理のことばかり考えていたために、無意識に『もやし』と入力してしまつたのだろう。

それを発見したとき、一気に血の気が引いた。上司に報告するべきだつたが、声をかけられなかつた。

なぜなら、このところ、社内のパソコンのシステムに不具合があり、業務に支障をきたすことが多く、真優の上司も、ひどくピリピリなさつておいでなのだ。そんな中、ミスをしたなんて、とてもじゃないが報告できない。だから、隠蔽<sup>ひんぺい</sup>という手段を取ることにした。

総務課の社員全員が帰つてから作り直したため、こんな時間になつてしまつた。

仕事中は、しつかり集中すべきだと、猛反省中だ。

わたしつてば、なんて間抜けなの？

ともあれ、『もやし』のやつめえー、どう料理してやろうかあ。

行き場のない苛立ちは、罪のない『もやし』に向かう。

真優は明かりの消えた駐車場へと足を進めた。ここをまっすぐ抜けるのが駅までの近道なのだ。

この会社に勤めて二年になるが、いまだに車を持てない真優は電車通勤をしている。会社からアパートの最寄り駅までは電車ですぐなのだが、残念ながら、最寄り駅からアパートまでが遠い。

なぜそんな不便なところを借りたかというと、とつてもかわいかったのだ、建物の外観が。それに新しかつたし……

娘の一人暮らしを心配した両親からは、もうちょっと駅から近いところにしたらと言われたけど、ここに住めるなら、どんな不便もいとわないと言宣言して押し切つた。

……で、現在、激しく後悔しているわけさ。ふつ。

虚しく笑つていると、メールが届いた。平沢由梨からだ。

由梨は同期で、入社直後すぐに親しくなり、いまでは親友だ。由梨はいま、ある男性に片思い中のだが、メールによると、なんでも今日、その彼と言葉を交わしたらしい。彼女の片思いの相手は、専務の補佐をしている相田といいうひとだ。二十代後半で、見た目のいい彼は社内でも有名。恋のライバルが山ほどいるため、由梨は最初から諦めてしまつていて。簡単に「頑張れ」なんて言う

のは無責任な気がして、真優はただ話を聞くだけにしていて。というのは、情けないけれど、真優はまだ恋をした経験がなく、助言するなんておこがましいと思つていてるからだ。

由梨に返信するメールの文面を考えていると、背後から走つてくる足音が聞こえてきた。少し気になつたものの、真優はメールをぶちぶちと打ち始めた。

ドン！

突然、激しい衝撃が真優を襲つた。

ぶつかってきた相手は「わっ！」と叫び、一方、真優は地面に膝をつき、なんとか顔は手でかばつたものの、強く胸を打ちつけた。

「うぐっ！」

痛くて、息ができない。

な、なんの、この状況？

地面上突つ伏した真優の上には、体当たりしてきた男が乗つていて。

「ちよっ……むぐっ」

文句を言おうとしたら、無理やり口を塞がれた。

「す、すまない！」

切迫した声で男が謝罪する。

な、な……なんで口を？

真優は恐怖で頭が真っ白になつた。

「どうしても見つかるわけにはいかない。頼む、静かにしてくれ！」

切羽詰まつた声に、真優は困惑した。

見つかるわけにはいかないって……どういうこと？ 誰かに追われているのだろうか？

このひと犯罪者なの？ それとも、犯罪者に追われているの？

ああ、もおつ、どうしていいかわかんないっ！

「……来ないな」

真優に覆い被さつたまま、男がぼそりと言った。

真優は思わずむつとする。追手の様子を窺う前に、この体勢をどうにかしろというのだ。ひとを下敷きにして、□まで塞いで……

「むぐぐぐ、むぐぐつ！」

必死に抵抗し、真優は『いい加減に、してよ！』と文句を言つた。言葉にはならなかつたが……

「あつ、すまない」

彼は、ずいぶんと申し訳なさそうに謝る。

えつ、なんか、意外な反応。思つてたより悪いひとではないようだけど……

「あの、君……□を塞いでいる手を離すが……悲鳴は上げないでくれるか？」

なんという身勝手な要請だと思つたが、ここはおとなしく頷いておくことにする。そのほうがきっと身のためだろう。

それに、追手の気配はなく、男は落ち着きを取り戻したようだ。このひとが何者かはわからない

が、自分に危害を加える気はないとわかり、真優は少し安心した。

「君に謝罪をしたいんだが……けどその前に、場所を移動したいな。……なあ、俺におとなしくついてきてくれるか？」

いまだ□は塞がれていて、下敷きにされている。見知らぬ男にぴたりくつかれたままではいたくない。抵抗する意思はないと伝えるため、真優は自由の利く限り、大きく首を縦に振つてみせた。すると男は、まず真優の腕を拘束したのち、□を塞いでいた手をゆっくりと外す。

この場に妙な緊張が生じた。

助けを呼ぼうとして、真優が悲鳴を上げるんじゃないかと、男は警戒しているらしい。

言いつけ通りに静かにしていると、男は安心したようで、ふ一つと息を吐き出した。

「ありがとう」

お礼を言われ、真優はびっくりした。先ほどまでの切羽詰まつた調子とは違い、とても好感のもてる声だったのだ。

男は真優を立ち上がりさせるために、手を貸してくれた。けれど、すぐにまた腕を掴まれた。拘束を解くつもりはないらしい。

離してくれと言いたかったがやめておく。不必要に刺激するのは危険だ。真優は用心深く男を観察した。暗さに目が慣れてきて、彼の顔が見える。視線が合い、真優は思わずビクンと震えた。

「安心してくれ。本当に何もしない」

男は言い聞かせるように言つたあと、真優の腕を掴んでいる自分の手を見つめる。

「君が逃げないと確信が持てたら……この手を離すんだが……悪いな」と、すまなそうに言う。彼がどんな人間か、まだわからない。追われて逃げてきたということは、犯人の可能性もなくはない。

でも、会社の駐車場でぶつかったのだから……

「あの……あなたは、ここに社員ですか？」

おずおずと聞くと、彼は沈黙してしまった。なぜかじつと真優を見つめてくる。……な、なんなの？

「あの？」

「い、いや……ちが……。あっ、君、膝を擦りむいてるんじゃないかな？」

彼は慌てたように言いつつ、真優の前にしゃがみ込む。あれほどしつかりと掴んでいた腕をあつさりと離し、真優の膝を確認した。

え、えーっと……いいのかな？ 逃げないと確信が持てるまで離さないんじゃなかつたの？

彼に言われて気づいたが、確かに右膝がジリジリと痛む。

膝を覗き込んでみると、ストッキングが破れている。ずいぶんみつともないことになつてているようだ。

「ちょ……ちょっと、み、見ないでください」

恥ずかしくなつた真優は、男から慌てて退いた。こんな足、男性に見られたくない。

「あ、あの、追われてるんですか？」

そう問いかけると、男はしゃがみ込んだまま、顔を上げてきた。彼が口を開きかけたそのとき、真優は救急車のサイレンが聞こえるのに気づいた。音のするほうに身体を向ける。するとまた腕を掴まれ、ぐいっと引っ張られた。

「な、何？」

「君はここに社員なんだよな？」

「そ、そうですけど」

ビクビクしながら答えると、彼は真優の腕をぱッと離した。

「ごめん。そんなに恐がらなくていい。君に危害を加えたりはしない。約束する」「は、はあ」

「理由は話せないんだが……危うく見つかりそうになつて逃げてきたんだ」

「も、申し訳ないんですけど……その説明だと、あなたは悪いひとのようにしか聞こえないんですけど……」

真優が恐る恐る告げると、彼は顔をしかめる。

「そう……だよな。……だが、どうしても詳しくは話せないんだ」

「あの、あなたのことは誰にも言いませんから……わたし、もう帰りたいんですけど」「あ、ああ……そ、うか。だよな」

彼はためらいながらも頷き、エントランスのほうを気にする素振りをする。

このひと、どうしてさつさとここを立ち去らないんだろう？ 追手が来ないとは限らないの

に……

「あの、逃げないんですか？」

なんだか心配になり、声をかけると、彼は困ったような表情を浮かべる。

「何か、気になることでもあるんですねか？」

「うん……その……友人のことが、気になつて……」

友人？ このひと、仲間がいたのか？

「仲間のひと、逃げ遅れただですか？」

そのやりとりをしている間にも、救急車のサイレンの音はどんどん近づいてくる。真優はサイレンのする方向に視線を向けた。すると男もつられたように、同じ方向を向く。

「いや、そういうことではないんだ」

改めて会話を続ける。

「そいつは、この会社の人間で……」

サイレンの音がぴたりとやんだ。どうやら、目的地に到着したらしい。ついつい、救急車を探してしまった。

「あ、あらっ？」

「あっ！」

真優が叫ぶのと同時に、彼も叫ぶ。なんと、救急車は会社のエントランスに横づけしたのだ。救急の患者が、この会社の人間だったとは……一体誰だろう？

「まつ、まさかな……」

焦あせつたように男が吠つぶやき、真優の腕を掴つかんできた。

「なつ」

「隠れよう。見つかるとまずい」

「わたしは隠れる必要ないんですけど」

「そう言わずに、もう少し付き合ってくれ。怪我をさせてしまつたし……詫びがしたい」

返事に迷つていると、彼に引っ張られてしまい、なぜかふたりで黒い車の陰に隠れた。

車の窓越しに様子を窺うかがう。

待つこと数分、担架たんかに乗らせられたひとが隊員たちの手によって運ばれてきた。スーツの男性がふたり付き添そつている。ひとりは由梨の片思いの相手、相田のようだ。もうひとりは……副社長の補佐の村形さんっぽいけど……？ ……ということは、彼らの上司が倒れたのだろうか？ ドキドキしていると、男が舌打ちをした。思わず顔を向ける。

「まさか……」

「ま、まさかつて？」

「あ……いや……なんでもない」

彼が口ごもつていると、携帯のバイブ音がした。真優のものではない、彼の携帯だ。おもむろに携帯のメールを確認すると、彼はずいぶんと渋い顔をした。よくない内容が書かれていたのだろうか？

救急車は再びサイレンを鳴らして去つていった。一体誰が運ばれていたのか気になるが……たぶん、月曜日に会社に行けばわかるだろう。

エンタランスに群がっていた野次馬がいなくなり、辺りは静かになつた。

「俺の友人かもしれない」

男が潜めた声で言う。ひどく沈痛な面持ちをしており、真優はじきりとした。

「えっ？」

「運ばれてつたやつ」

「どうしてそう思うんですか？」

「連絡がないからさ。俺が無事逃げられたか、確認してこないわけがないのに……」

「いまのメールは、そのひとからじゃなかつたんですねか？」

「いまのは、俺の姉貴から」

「お姉さん？」

「なあ、君」

「はい？」

「車で自宅まで送らせてもらおるか？」

男は身を隠している黒い車を指しながら尋ねる。

真優は答えに迷つた。その申し出はありがたい。なんせ、転んだせいで膝に血は滲んでいるし、ストッキングはビリビリ。こんな姿で電車に乗つて帰るのは、ものすごく恥ずかしい。

「

」

でも……知らない男のひとの車に乗るつていうのは……さすがに……

「……そう……ですね」  
「俺は信用ならないか？」

真優は「そんなことは……」と口ごもる。まあ、そななんだけど……

「君の立場なら、信用できなくて当然だ」  
男は腕を組んでしばらく思案していたが、突然声を発した。

「なあ、君ってさ」  
「なんですか？」

「猫、好きか？ 苦手か？」

「ね、猫？ ずいぶん唐突ですね」  
「差し迫つた事情があつてな」

「また、意味のわからないことを」  
呆れたように言うと、男が噴き出した。

「君、面白いな」

くつくつと笑つている彼を見ていたら、自然と頬が緩んでしまつた。  
このひと、やっぱり悪いひとじやなさそうだ。

「……猫は好きですよ」

真優は自然とそう口にしていた。

「そうなのか？」

真優の返事は、彼をとんでもなく喜ばせたようだつた。

「実は俺、いま、ものすごく困った状況に陥つてるんだ」

「はい？ あなたがいま、困った状況にあるのは言われなくてもわかりますけど……」

「いや、そういうことじゃないんだ。そつちじやないというか」

真優は眉を寄せた。

「これから姉貴ん家の猫を預かることになつてるんだが、俺は猫が苦手なんだ。だから君、二週間、俺の代わりに猫の世話をしてくれないか？」

「礼はたっぷりとさせてもらう。頼むから引き受けてくれないか？」

「なんとも突飛な頼みだ。言葉も出ない。  
よほど切羽詰まつているらしい。彼の必死な様子に、思わずほだされそうになる。  
ダ、ダメダメ……」

「む、無理です。……だつて、わたしのアパート、ペット禁止だから」

「俺の家で面倒を見てくればいい。そのほうが俺も助かる。姉貴のやつ、旅先から電話をかけてきて、元気な鳴き声を聞かせろなんて言い出しそうだから」

「お姉さん、ずいぶんかわいがつていらっしゃるんですね」

「ああ、甘やかし過ぎだと思うけどな。だから、そりやあもう、でっぷり太つて……」

丸々つとした猫を想像してしまい、口元が緩みそうになる。もう、猫かわいがりしたくなるくら

い、かわいいにやんこちやんなんだろうなあ。会つてみたいかもお。

マンチカンかなあ、ソマリかなあ、それとも、スコティッシュフォールド？ メインクーン  
でもいいけどお。

「あの、お姉さんにやんこちやん、種類はなんですか？」

胸が弾み、勢い込んで尋ねると、彼に苦笑された。

恥ずかしくなつた真優は顔を赤らめた。

「話の続きは、車に乗つてからつてことにしないか？」

くすくす笑いながら提案されたが、やっぱりまだためらいは払拭できない。このひとは信用していいような気がするんだけど……

「後部座席のほうがいいか？」

考えている最中に突然声をかけられて驚いた真優は、思わず首を横に振つていた。

「そう？ それじゃ、前に」

「ええい、もうなるようになれ！ 真優は残っていたためらいを捨て、助手席に乗り込んだ。

「ふう！」

運転席に座ったところで、彼は大きく息を吐き、ネクタイを緩める。その仕草がひどくセクシーで、真優はどきりとした。

「ああ、すまない。ネクタイとか、俺、あまり馴染みがなくて……窮屈なもんだから……つい」「い、いえ。構いませんので、どうぞ」

何が『どうぞ』なのか、自分でもよくわからないが……自然とそう口走つてしまつていた。

「あの……じゃあこれから予定を変更して、姉貴のところに向かつていいか？」

「えっ？ わ、わたし、まだ引き受けるとは……」

「リンを見てから引き受けれるかどうか、決めてくれればいい」

彼は真優の返事を待たずにエンジンをかけ、車を発進させる。彼女は慌てた。

「あ、あの……で、でも……」

にやんこを見てしまつたら、断りづらくなつちやうのに……

それにしても、このひと強引すぎる。そんなに猫の世話が嫌なのだろうか？

「そんなに苦手なのに、どうして引き受けることにしたんですか？」

「姉貴の旦那がいま海外赴任ふりんしてて、もうすぐ四ヶ月になる。なかなか戻つてこられないみたいで……だから姉貴が会いに行くことになつたんだ。実はまだ新婚ほやほやでね」

「結婚してすぐ離れ離れなんて……可哀想です」

「俺もそう思う。だからまあ、引き受けることにしたんだけど……俺はリンとはソリが合わないから不安でね」

「にやんこちゃんの名前、リンちゃんって言うんですか？」

名前を知つたことで、真優の脳内にやんこ像はさらにリアルなものになつていく。

「そうだ、種類を聞かれてたんだつたな。えーと……何度か聞いたんだが、長つたらしい名前で……ノルウェー……なんとかつて……ダメだ、思い出せないな」

「あっ、わかります。ノルウェージャンフォレストキャットでしょう？」

彼は呆氣あつけにとられた顔をしたあと、噴ふき出した。

「君、すごいな。そろそろ、そんな名前だつたぞ。……それでも、君つてほんと、猫が好きなんだな」

「だつて、にやんこつてかわいいじゃないですか。……あっ、でも、あなたは苦手なんですよね」

そう言うと、彼は困つたような顔をした。その表情に、なぜか鼓動が速まる。

「あの……他に預けられる人はいないんですか？ ご両親とか」

「両親がいま住んでいるマンションは、ペット禁止なんだ」

「ペットホテルとかは？」

「以前預けたことがあつたらしいんだけど、ストレスがたまつて、大変なことになつたらしい」

「そうなのかな……かなり繊細な猫ちゃんらしい。真優の脳裏のうりに、いたいけなにやんこが浮かぶ。

「だから、猫好きの君が世話をしてくれたら、本当に助かる」

「そう言われると……」

「そういえば……名乗るの、忘れてたな」

「あ……ああ、そういうえば、そうですね」

「猫の名前やら種類やらの前に、自己紹介すべきだった。俺は、ふじえだんや藤枝慎也。君は？ 教えてもらえるか？」

「は、はい。わたし、中野真優です」

「まひろ？ ヘーっ、どういう字を書くんだ？」

「真実の真に、優しいの優です」

ちらつとこちらを向いた彼にふつと微笑まれ、真優は戸惑った。なんだかその笑みに、含みを感じたのだ。彼はその様子に気づき、慌てたように説明してくれる。

「ああ、すまない。俺、ひとが自分の名前をどんなふうに表現するのか……興味があつて慎也の言つていることが、いまひとつ理解できず、真優は「名前を……表現？」と口にして、首を捻る。

「いま君は、自分の名前を、真実の真に、優しいの優と言つたろ？」

「は、はい。あの、それが？」

「真剣の真に、優秀の優と言つてもいいわけだけど……君は、いつもさつきと同じように答えてるんだろう？」

真優は感心した。彼の言うとおりかも。まあ、自分が真実、優しいひとになれているかは別として……

「それじゃ、しんやさんは……あっ、そ、そう呼んでも？」  
慎也は頷き、さらに話を続ける。

「たいがい親がそう教えるんじゃないかな？ つまり親は、子どもにそうあれと望んでいるってことだらうと思ってさ」

真優は感心した。彼の言うとおりかも。まあ、自分が真実、優しいひとになれているかは別として……

「構わない。俺も真優さん……いや、もういつそ呼び捨てにしてもいいか？ 俺も慎也でいいから」  
よ、呼び捨て？ いきなりハードルが高いけど……

「も、もちろん、わたしのことは好きに呼んでもらって構わないです」  
「うん。それじゃ、真優」

「は、はいっ」

名前を呼ばれ、心臓が跳ねる。男のひとに名前を呼び捨てにされるなんて、初めての経験だ。

「あの、それで、あなたの名前の漢字は？」

「俺は……」

なぜか慎也は口ごもる。そして、ちらりと真優を見て、にやつと笑う。

心臓がトクンと高鳴った。

こういう状況に慣れていないから、緊張しているのかな……ちょっとしたことにいちいち過剰に

反応してしまって……わたしときたらまつたく恥ずかしい。

「慎也の慎は、慎重の慎と説明しやすいんだが、『や』のほうがな」「そんなに説明しづらい漢字なんですか？」

頭の中で、『や』と読む 難しそうな漢字を思い浮かべながら言うと、慎也がおかしそうに笑い出した。彼の笑い声が真優の胸に奇妙な具合に響き、戸惑つた。

このひとの声って、低音のせいか、胸に響くみたい。

「逆だよ。すごく説明しやすいんだ。ひらがなの『せ』、みたいなやつ」一瞬困惑した真優だが、すぐに笑いが込み上げてきた。くすくすといつまでも笑っていると、頭をコツンと小突かれた。

「笑い過ぎ！」

「だ、だって。慎也さんが悪いんですよ。どんな難しい漢字なんだろうと思うじゃないですか」

「それにしても、真優つていい名前だな」「確かに」

慎也も笑い出した。どうにも胸がくすぐつたい。

「そ、そうですか？ そんなふうに言われると、照れます」

「名前って、大きいよな。名前から受ける印象で、そのひとの性格を判断してしまうこともある」

「ああ、誠の文字を使つてると、誠実なひとだとイメージしてしまってみたいことですか？」

「そうそう。小説の主人公でも、ユーリキっていう名前のヒーローには、強い敵に果敢に挑むことを

期待したり」

「ああ！ なんでしたつけ、その小説！」

それから、互いの好きな小説の、登場人物の名前で話が盛り上がった。

「ほんと面白いですね。登場人物の名前だけで、こんなに話が弾むなんて思つていませんでした」「俺も驚いた。小説の趣味が似てたつてのもあるんだろうけど」

好意的な言葉に、胸がくすぐつたくなってしまう。

「姉貴の家まで、もうすぐだから」

助手席から見える景色は暗く、ここがどの辺りなのかさっぱりわからない。

「あのさ」

「はい？」

「……聞かないのか？」

「えっ？ 何をですか？」

「その……もちろん、さつきのこと……俺が逃げてた理由……」

「ああ、そういうえばそうだったと思い出す。

「どうして逃げてたんですか？」

ストレートに聞いたら、慎也がくすくす笑い出した。

「あの……何がおかしいんですか？」

「いや……その……ごめん」

慎也は気まずそうな顔をした。

「別に謝らなくていいですけど……」

「あの、とにかく俺は……犯罪者ではないからな」

「それじや、追われていたのはなぜなんですか？ 救急車の近くにいたふたりに追われていたんですけど？ ……そういえば、救急車で運ばれたのって……？」

真優は慎也を見つめた。

「あなたの友人だつたんでしょう？ 連絡が来ないって……」

「たぶん……そうだと思います」

「い、いいんですか？」

「そう言われても……俺にできることはないしな。……いずれ連絡をくれると思う」

淡々と語っているが、慎也の表情からは不安が伝わってきた。

「きっと大丈夫ですよ。救急隊員のひととか、相田さんたちも、そんなに慌ててる感じじゃなかつたし」

「そうだな……真優、ありがとうございます」

改まってお礼を言わされて、真優は顔を赤らめた。

### 3 暗号に困惑

「それで話を戻すけど……リンのこと、引き受けてくれるか？」

「で、でも……明日明後日の休日はいいですけど、月曜からは仕事がありますし……いえ、あの、それ以前に、慎也さんのところに泊まるなんて、やっぱり無理ですよ」

「俺は信用できない？」

「そ……そ……う言われると……困りますけど」

「俺の家、けっこう広いんだ。ちゃんと空き部屋もある。そこを君に提供しよう」

「どんどん話を進める慎也に、真優は慌てた。

「ですから、男のひとの家に泊まるなんて……」

「……そうか、よし。なら、君が安心できるように手を打とう」

手を打つ？

すると彼は、<sup>うかた</sup>路肩に車を停め、携帯を取り出した。

一体誰にかけるつもりなのだろう？

「いまどこにいる？ ……ああ、そうか。ちょうどいい。今夜泊まってくれ」

今夜泊まってくれなんて……どう考へても電話の相手は慎也の恋人だろう。

「ああ、これから人をひとり連れて帰るけど、今夜から泊まり込むことになるから」

その言葉を聞いた真優は、目を見開いた。

ちょ、ちょっと待つて！ どういうこと？

まさか、慎也さんの恋人のいる家に、わたしが猫の世話係として行かなきやならないっていうの？ 慎也と彼女が仲睦まじくしている隣で、猫を世話している自分を想像し、顔が引きつる。

じよ、冗談じゃない！ そんな状況、耐えられない！

「あ、あのっ！」

断ろうとすると、手で制された。慎也はそのまま電話の相手と話し続けている。

会話中だから、黙つてくれということなんだろうけど……

「ああ、そうだ。それで、ミッショーン、ピンナナワン、ロンクロ、完全体で頼む。聞き取れたか？ ……まあ、ロンクリでもいいさ。それと、俺の部屋の隣の部屋、できる限り片づけといってくれ。ああ、それと……ちょっと待つてくれ」

高圧的な話しぶりで相手に指示を出していた慎也が、急にこちらに顔を向けてきた。暗号のような言葉に困惑していた真優は、慎也と目を合わせて眉を寄せた。

「夕飯、まだよな？」

「は、はい」

戸惑いながらも答えると、慎也は頷いて「俺のどこで準備させようかと思つてるんだけど……」と言った。

「あの、リンちゃんのお世話なら、その方にしてもらつたらいいんじゃありませんか？」  
真優は携帯を指さして言った。

「こいつは猫アレルギーなんだ」

慎也は携帯の送話口を押させて、声をひそめて言う。

「ね、猫アレルギー？」

「だ、だからって……わたしが……」

「君しか頼れないんだ。頼む。その代わり、たっぷりと礼をさせてもらう」  
たっぷりと礼？

「たっぷりですか？」

確認すると、慎也は「ああ」と、事も無げに答える。なんだか、無性に腹立たしい。  
よーし、みてなさい。仰天させてやる。

「なら、新車をください。深いピンクの軽自動車がいいです。それがダメなら……」「わかった。それじゃ、決まりだな」

へつ？ な、何？

わ、わかった？ わかつたって、何が？

「夕食ふたりぶん頼む。……いや、まだ寄るところがあるから一時間後くらいだな。それじゃ、頼んだぞ」

通話は終わつたらしい。

「あ、あのおく、いまのは、じょうだ……」

「俺さ！」

真優の台詞を、慎也は鋭い口調で遮った。ぎょっとした真優は言葉を失い、彼を見つめる。慎也は涙みのある目つきをし、ぐつと顔を近づける。心臓が飛び出すんじゃないかと思うほど、ドキドキした。

「冗談……嫌いなんだ」

目を眇めて、マジ顔で囁かれる。真優は泡を食つた。

こ、このひと……話しぶりは俺様でも、根はやさしいひとだと思ってたのに……ちよ、ちょっと違つたのかも。

「で？ 君……いま何か、俺に言うところだったようだが？」

これだけ脅されて、冗談で言いましたと言えるひとがいるなら、ぜひお会いしたい。

けど、まさか、本気でお礼に車をくれるつもり……じゃないよね？

だって、猫の世話を二週間するだけ。あつ、もしかしたら玩具のミニカーとかでごまかす気なんじゃ……

わたしはミニカー一個のために、にゃんこシッターを二週間も引き受けることになっちゃつたのか？

いつやーつ！

「ひとつ言つとくけど……」

心の中で盛大に悲鳴を上げていると、慎也が話を切り出してきた。

「こ、今度は何を言うつもり？」

「な、なんですか？」

真優は顔を引きつらせながら尋ねる。

「いまの電話の相手は俺の彼女とかじやないから、誤解しないように」

慎也は真顔で言い、真優の反応を窺つてくる。

「……」

「何か返事をしてくれないか？」

「いえ……なんて言えばいいのかわからなくて」

「君、彼氏とかいるのか？」

「……」

真優はまた黙り込んだ。

なぜそんなことを聞くのだろう？

「もしいるのなら、こんな頼みごとをしちゃ、彼氏に悪いからな。それで、いるのか？」

「あ、ああ、そういうことが……」

「いたら、にゃんこのお世話、しなくてもいいんですか？」

そう言うと、慎也は顔をしかめて口を開いた。

「君に彼氏がいるかいないか、聞いてるんだけどな」

なかなか質問に答えられない真優に苛立つたようだ。思つたよりも短気みたいだ。それでも、不思議と怖さは感じない。

「いまの電話の相手、ほんとに慎也さんの彼女じゃないんですか？ 慎也さんと彼女さんがいるところに泊まるなんて、身の置き場ないです……わたし、ほんと嫌ですか」「違う。それに俺、フリーだから」

へーっ、こんなにかつこいいのに……彼女がいないのか。フリーだなんて、ちょっと嬉しいかも……

「それで？ 真優、引き受けてもらえるか？」

そんな必死に頼み込まれたら、期待に添いたくなるじゃないか。

「わかりました、引き受けます」

いくばくかの不安を胸に残しながらも、真優は答えた。

「ほんとか？ 助かる」

ほつとした笑みを浮かべられて、嬉しくなってしまった。

泊まり込みになるとはい、慎也とふたりきりというわけではない。それが嬉しいのか残念なのか自分でもよくわからない。でもまあ、なんにしても、かわいいにゃんこのお世話をできるのだ。

二週間限定のにゃんこシッターか。楽しみかも。

真優は途端にワクワクしてきた。

「でも、わたしも仕事があるので、つきつきりではお世話をできませんよ」

「平日の日中だけなら、世話をしてくれそうな奴らがいる」

「えっ？ 世話をしてくれそうなひとが複数いるんですか？ なら、そのひとたちに」

「だから、そいつらを頼れるのは、平日の日中だけなんだ。猫の世話をしてほしいから泊まつてくれなんて言つたら、たぶん殴られる」

な、殴られる？

「なんか、過激ですね」

「で……君はフリーなんだな？」  
改めて確認され、真優は頷いた。

#### 4 僕はかなく散ばらつた夢

真優は洒落しゃれた一戸建ての家を見上げた。

ここが、慎也さんのお姉さんのお家か……

駐車場には普通車と軽自動車が停まつていて。慎也は壇の前に車を停めた。車から降りる慎也を黙つて見ていると、彼がこちらを振り返ってきた。

「どうした？」

「は、はい？ どうしたって、なんですか？」

「いや、君も一緒に行くだろ?」

「いえ、わたしはここで待っています。わたしのことは気にしないでいいので、慎也さんごゆつくりどうぞ」

リンちゃんを引き取つてくるだけじゃなくて、姉弟で話だつてあるだろう。赤の他人がついていく必要はない。だいたい真優は足を怪我して、みつどもないことになつてている。他人様の目にさらしたくない。

「君自身を見てもらつたほうがいいと思うんだ」

「わたしを見てもらう……?」

「どんなひとが面倒を見てくれるのか、飼い主としては気になるんじゃないかと思うんだ。君に会えば、姉も安心する」

「ああ、確かにそうかもしれない。もし自分が逆の立場なら、会つておきたいと思うだろう。でも……この格好で出ていきたくないんですけど……」

「そう言うと、慎也はハツとして顔をしかめた。

「ごめん。すっかり忘れていた」

慎也は慌てて助手席側に回り込んできた。そしてドアを開ける。

「すぐに手当てをしよう。姉に頼むから……ほら、行こう」

「いえ、いいですよ。慎也さんのお姉さんに、そんなご迷惑をかけては……」

「いいから」

慎也は真優の腕を掴み、強引に外に引っ張り出そうとする。彼女は仕方なく車から降りた。

「これは、ひどいな!」

真優の足を見た慎也が叫んだ。彼の大声につられて真優も自分の足を見ると、門燈の光ではつきりと確認できた。

血まみれになつていて、まるで大怪我をしているかのようだ。でも、そんなに痛くないし、実際はそれほど深い傷ではないはずだ。たぶん手当てもせずに車に乗つっていたから、その間にストッキングに血が滲んでしまつたんだろう。

「は、早く手当てを……いや、病院のほうがいいか?」  
早口でまくしたてる慎也を、真優はなだめた。

「痛くないです、全然。病院なんて行く必要ないです。ひどく見えるだけですよ。あの、それよりもしかすると車のシートが血で汚れちゃったかも。そつちを早く確認したほうが……」  
助手席を確認しようとした真優は、強い力で手を引かれる。

「そんなのどうでもいい。いいから、来い」  
慎也是真優を強引に家の門まで引きずつっていく。

「真優、ほんと悪かつたな」

表札の下にあるインターフォンを押しながら、改めて謝罪され、真優は首を横に振つた。

「大丈夫ですってば。そんなに痛くないです、きっと小さな傷ですよ。この血を拭つたら、慎也さん、拍子抜けしちゃいますよ」

安心させようと笑顔でそう言うと、慎也が真優をじっと見つめてきた。

彼と視線が合った途端、ドキドキしてきた真優は目を泳がせた。

慎也は「ふつ」と笑い、なぜか真優の頭に触れてきた。そして、髪をわしやわしやとされる。

「な、なんですか？」

どう反応したらいいのかわからない。

髪をわしやわしやにされたというのに、こんなにもドギマギしてしまうなんて……

「慎。遅いじゃないの。待ちくたびれちゃったわよ」

真優が困惑していると、インターフォンから責めるような女性の声がした。

「姉貴のやつ」

インターフォンを睨みつけながら、慎也はむつとしている。

「ひとにものを頼もうとするやつの態度じゃないよな？ 真優」

同意を求められても困る。

「あ……まあ、ノーコメントで」

苦笑しつつ答えると、慎也が面白くなさそうな顔をする。彼が真優に何か言おうとしたとき、玄関が開いた。

「何やつてんの？ 早く入つていらっしゃいな」

「ああ。いま行く」

慎也は真優の手首を掴み、玄関に向かう。真優は緊張しつつ彼についていった。

「あら、珍しいわね、あんたがスーツにネクタイだなんて……あ、あらっ？」

真優に気づいた慎也の姉は、戸惑つた声を上げた。

「実は、俺のせいでの彼女に怪我をさせちまつたんだ。姉貴、悪いけど」

「ま、まあっ！ ひどい怪我じゃないの。は、早く入つて、ほら」

血だらけの足を見た慎也の姉は、慌てて家中に招いてくれた。

十分後、真優の足には慎也の姉によつて包帯が巻かれていた。

大袈裟とは思ったが、濡れたタオルで血を拭つてもらつたら、意外と傷は広範囲に及んでいた。そこでガーゼを当てて、包帯を巻いてもらつたのだ。けれどしょせん擦り傷だ、数日もあれば治るだろう。まあ、傷痕が完全に消えるまでには、時間がかかりそうだけど……

「ありがとうございました、お姉さん。すいません、お手間をかけてしまつて」

「何を言うの。あなたが謝ることないわ。この、ふつつかな弟のせいなんだから」

「ふつつかで悪かつたな」

「あら、反論できるの？」

「いや……悪かつたと思つて。真優、ほんとすまなかつた」

「もういいですよ。結局、たいした傷でもなかつたし……」

「たいした傷だつたわよ。ねえ、どうしてこんな怪我を？ 慎、あんた彼女に何をしたのよ？」  
まか、痴話喧嘩の挙句、カツとして突き飛ばしたんじゃないでしょうね？ そんなやつ、男の風上

にもおけないわよつ！」

「勝手な妄想をして怒鳴らないでくれないか。そんなんじやない」「なら、どうしてこうなったのよ？」

「あ、あのつ」

口喧嘩を始めた姉弟の間に、真優は慌てて割り込んだ。

「わたしが転んでしまっただけなんです。ほんとに慎也さんは悪くないので」

「まあ、真優ちゃん、健気ねえ。慎、あなたずいぶんとかわいい彼女見つけたじゃないのか、彼女？」

誤解されて焦った真優は、思わず慎也のほうを見た。彼も困った顔をしている。

「それじゃ、俺そろそろ帰るから……姉貴、リンは？」

え？ どうして否定しないの？ 慌てる真優をよそに姉弟の会話は続していく。

「いつ迎えにきてくれてもいいように、夕方からケージに入れておいたわ。もう、あの子、ケージが大嫌いだから、大変だつたのよ」

ケージが嫌いかあ。リンちゃんは纖細<sup>せんざい</sup>なのね。

丸々としたノルウェージヤンフォレストキャットを思い浮かべて、真優は尻を下げた。

「いいよご対面だ。とんでもない流れで引き受けることになつたが、かわいいにやんこと過ごせるのだ。めいっぱい楽しんじゃおう。

胸にぎゅっと抱きしめて、やわらかな毛に頬ずりして……そしたら、にゃんこがペロペロつとほつ

「ぺたを舐<sup>な</sup>めてきて、いやーん、もおつ、くすぐつたーい……とかね。むつふふーつ。

「……そんな話を聞かされると、俺たち、先が思いやられるな」

慎也はしかめつ面をして、疲れたように言う。そうだった、彼は猫が苦手なんだつけ。

「慎也さん、大丈夫ですよ。わたしがお世話しますから」

くすくす笑いながら言うと、慎也から嬉しそうに声をかけられる。

「ありがとう、真優」

その笑顔はどんでもなく素敵だった。どきりとした真優は、慌てて視線を逸<sup>そ</sup>らす。

すると、慎也の姉が、急に笑い出した。おかしくて仕方ないというように、腹を抱えて笑っている。

「姉貴、何を笑つてんだ？ 早くリンを……」

「だ、だつてえ。あんたが女の子にデレデレしてる姿なんて初めて見たから。こんなかわいいところがあつたのねえ」

「あのなあ。……ま、まあいい。とにかくリンを連れてこいよ。早くしないと、俺たちこのまま

帰るぞ！」

慎也が腹を立てている一方で、慎也の姉は笑いながら部屋を出でていった。

ふたりきりになり、微妙な空気が流れる。

「……なんか、姉貴を誤解させたみたいだ。悪い」

慎也が頭を下げる。

そんなしおらしい態度をとられると、先ほどの戸惑いはどこへやら、こっちが申し訳ない気分になつてくる。わたしなんぞと恋人同士と誤解された挙句、デレデレしてゐるなんて言われて……込み入つた事情を説明するのも面倒になり、真優は彼の姉の前では恋人のフリをすることに決めた。

「わたしのほうこそ、すみません」

「は？ なんで君が謝るんだ？」

「だつて……」

「お、お待たせ」

何やら苦しげな慎也の姉の声を耳にして、真優は振り返つた。  
慎也の姉は、大きなケージをひどく重そうに抱えている。

へつ？

ケージの中を見て、真優は言葉を失つた。

丸々つとしたかわいいにゃんこのイメージが、ガラガラと音を立てて崩れてゆく。  
慎也さんは「でつぱり」と表現していたけど……ま、まさにその通りだ！

「おいおい、姉貴。リンのやつ、また太つたんじゃないのか？」

「そんなことないわよ。前からこんなものだつたわよ」

「リン、お前、すでに猫じやないな」

ケージの中から自分を見つめているリンに、慎也が言う。

「にゃごーーっ！」

獰猛<sup>じょうもう</sup>そうな鳴き声に真優は震え上がつた。明らかにリンは、慎也を威嚇<sup>いがく</sup>している。

むつ、むちやくちや、こ、こ、恐いんですけどお。

こんなにやんこ、とてもじゃないけど触れない。近づける気がしない。

にゃんこを抱きしめて頬ずりする夢は僕く散り、いますぐトンズラしたくなつた真優だつた。

## 5 切ない別れ

どうしよう？ どうしよう？ どうしよう？

リンちゃんが、こんな獰猛<sup>じょうもう</sup>なにゃんこちやんだつたなんて。  
とてもじやないけど、お世話なんてできないよお。

青くなつてゐる真優の横で、慎也はケージを受け取つた。その途端、リンの威嚇<sup>いがく</sup>つぱりはヒートアップする。

「姉貴、こいつもうちよつと、おとなしくならないのか？」

リンの鳴き声に、慎也は弱つたよう<sup>に</sup>言う。

「わたしと離れ離れるのを感じてるんだと思うの。それで神経が過敏になつちゃつてるのよ。  
リンはすごく繊細<sup>せんざい</sup>だから……」

慎也は重いため息をついた。

それから、さっさとここを去ろうと思ったのか、ケージを抱えて部屋から出ていった。真優は慌てて彼に続く。

「姉貴、リンの荷物は玄関にあるあれだな？」

玄関に向かいながら慎也が聞く。その大量の荷物は、真優たちがここに来たときには、すでに置いてあつた。

「リンは依然として、わめきながら暴れている。あれではケージを抱えるだけでも大変だろう。『ええ、そう』

慎也がリンを家の外へ運び出し、真優は玄関先の荷物に目を向けた。

「お姉さん、どれを運べばいいんですか？」

「ね、ねえ、真優ちゃん」

慎也の姉は声を潜めて話しかける。

「はい？」

「慎と、どこで知り合つたの？」

返事に困る。先ほど会社の駐車場で、突然後ろから突き飛ばされて知り合いました、なんて言えない。

「あいつ、家に引きこもつてばかりいるから、彼女なんてできるわけがないと思つてたのよ」

引きこもつてばかりいる？ そうなのか？ とてもそうは見えない……というか、出会つたば

かりのわたしに、にやんこシッターをすると約束させ、強引にここまで連れてきたことを考えると、ぐいぐいひとを引っ張つていくリーダータイプの男性に見える。

「でもよかつたわ。あなたみたいないい子が彼女になつてくれて……」

「あ、ど、どうも」

「でも、あいつ、仕事ばかりでしよう？ ちゃんとデートとか連れていつてもらえてる？」

「ああ……まあ、はい」

恋人のフリをすると決めたものの、どう答えていいかわからず、あやふやな返事になつてしまふ。するとそこに、慎也が戻ってきた。

「姉貴、リンの荷物はどれ？」

「どれって、ここにあるの全部よ。お願ひね」

「はあつ？」

荷物を見て、慎也が呆れた声を上げる。確かに相当な量だ。

「姉貴の荷物も混ざつていてるんだと思つてたよ」

「わたしの荷物は寝室に置いてあるわよ。リンのと、混ざつちゃつたら困るから」

そうだった。お姉さんは明日から、海外赴任している旦那様のところに行くんだつたね。

「明日、出発されるんですよね。お姉さん、気をつけて行つてきてください」

「まあと、真優ちゃんありがと。なんかもう初対面とは思えないくらい、親しみ感じちゃうわあ」嬉しそうに言われて顔が引きつりそうになる。親しみを感じてくれているのは嬉しいが……ちや

んとリンのお世話ができるのか、はなはだ不安だ。

リンの荷物をやつと車に運び終え、真優は後部座席に乗り込んだ。

真優の隣にはリンが入っているケージが置かれている。走行中にケージを支える任務を仰せつかつたのだが……。

正直、この任務にさえ怯えているわけで……。

なんせ、リンは依然興奮していて、ドスのきいた鳴き声を上げ続けているのだ。

「真優、大丈夫か？」

運転席に座つた慎也が、申し訳なさそうに聞いてくる。

「大丈夫ですよ」

大丈夫ではなかつたが、慎也と彼の姉を少しでも安心させたくて、真優は明るく答えた。

「わたし……やっぱりやめようかしら？」

車の外でふたりのやりとりを見ていた慎也の姉が言う。

「はあっ？ 姉貴、いまさら何を言い出すんだ」

「そうですよ。旦那様、すごく楽しみに待つていらっしゃいますよ。リンちゃんなら、わたしに任せ下さい。わたしは猫に好かれる体質なんです。リンちゃんたって、すぐに慣れてくれます」

言いすぎだと思いつつも、この場を収めるためにつっこり笑つておく。

きつとなんとかなる。なつてほしい！ と切実に祈つていると、リンがひとりわざわざ大きく鳴いた。驚いた真優は、ケージを支える手を離してしまつた。豪語した手前、ものすごくいたたまれない。

「あの……真優ちゃん？」

ま、まずいかも。いまのでお姉さんの不安を煽つてしまつたようだ。

「だ、大丈夫ですよお」

なんとか笑みを浮かべる。

「真優、目が泳いでるぞ」

運転席に座つた慎也がぼそりと呟いた。真優には聞こえたが、車の外にいる慎也の姉には届いていないだろう。

「慎也さん！」  
バツクミラー越しに慎也を見ると、笑いを堪えているのがわかつた。

むつとして大声で呼びかけると、慎也は愉快そうに笑い出す。

だが、余裕な感じで笑つている慎也を見て、真優は不思議と気持ちが落ち着いてきた。

猫が苦手な慎也だけど、真優ひとりにリンを押し付けることはしないように思えて、安心したのだ。

「真優ちゃん、ほんと迷惑かけちゃうと思うけど、リンのことよろしくお願ひします」「はい。任せて下さい」

今度は、自然と微笑むことができた。真優の笑顔に慎也の姉もほつとしたようだつた。  
慎也がエンジンをかける。すると、鳴き続けていたリンが、ぴたりと静かになつた。  
真優は驚いてリンを見つめた。

「ついに諦めたか」

「そうだと思う。もう無理だつてわかつたんだわ。リンはすごく頭がいいのよ」

慎也の姉は苦笑混じりに言つたが、その声は微かな震えを帶びている。真優もじわっと涙が湧いてきた。車が動き始める。真優は静かになつたケージを支えながら、遠ざかっていく慎也の姉を見つめていた。

## 6 いまは納得

「真優」

慎也の姉の姿が見えなくなると、慎也が呼びかけてきた。

「はい」

「君の家の方向は?」

「はいっ? 方向を聞かれても……ここがどこだかわからないのだから答えようがない。さ、さあ?」

「さあつて……真優、頭は大丈夫か?」

からかうように言われて、真優は拗ねて彼を睨んだ。

「そういうことじやありませんよ。ここがどこだかわからないから、答えられなかつただけです」

「そうか、それじゃ住所教えて。ちょっと車を停める。ナビに登録して走ることにしよう」

慎也は車を路肩ろかたに停めた。そして真優の住所をさくさくと登録する。

わたしの住所を登録したつてことは、これからわたしの家に向かうつてことだよね? 送つてくれるわけじやないよね? リンちゃんのお世話をするとんだし……わたしは一週間、慎也さんの家に泊まつて……あ……あ、なるほど。わたしの荷物を取りに行こうとしてるのか。

「ここか?」

「はい。わたしの駐車場、その先の右側にあるので」

「君の駐車場? 君、車は持つていんじゃないんじやないのか?」

「将来のために借りているんです。あとからでは借りられなくなるかもしけないって聞いて……それに、両親が来たときにも使えるので、いまも無駄にはなつていませんし」

「へえ」

車が停まると、真優はすぐにドアを開けた。

「それじや、荷物取つてきますね」

彼女が車から降りると、慎也もドアを開ける。

「一緒に行つてもいいか? 無茶な頼みを聞いてもらつたんだ、荷物を運ぶ手伝いくらいさせてもらいたい」

「それじや、お願ひします」

「有り難く申し出を受け入れ、慎也と部屋に向かう。

肩を並べて歩き始めると、必要以上に彼を意識してしまい、鼓動が速まる。

ついさっき出会ったばかりなのに、あり得ないほど接近していることがおかしい。

「綺麗にしてるな」

玄関先から真優の部屋を眺めて、慎也が言う。彼は部屋に上がつてくるつもりはないようだ。真優は急いで荷造りをした。

月曜日からは、会社の送り迎えもしてくれるらしい。なんだか、至れり尽くせりだ。不安の種だつたリンは、いまは拍子抜けするくらいおとなしくしている。リンの世話をするなんて、絶対無理だと思つていたけど、懐いてくれそうな気がしてきた。にやんこシッターも案外楽勝かもしれない。

「あの、かなり遅くなっちゃいましたけど、慎也さんのところにいるひと、怒つてないでしょうか？」

慎也の家に向かいながら、いまになつて先ほどの電話の女性が気になつてきて、真優は尋ねてみた。慎也は恋人ではない、とはつきり言つていたけれど……簡単に、泊まつてくれと言えるところから察するに、彼女とは相当親しい間柄のようだ。

なんだか胸がざわついてきて、真優は顔をしかめた。これって……なんだろう？

「そんなことは気にしなくていい。色々と頼み事をしておいたから、忙しくて遅いとか気にしてるヒマもないだろ」

そういうえば、意味のわからない言葉を羅列したあと、部屋を片づけといてくれと頼んでいたつけ……

もしかして、わたしがこれから使わせてもらう部屋を片づけてくれているのかな……  
「あの、そのひとつ話していたとき、慎也さん、暗号みたいな言葉を使つていましたけど……あれは？」

慎也の横顔を見つめ、返事を待つ。

「そうだな……君が、俺が口にした暗号を正しく記憶していたなら、教えてやつてもいい」  
ずいぶんと楽しそうに言う。

そんな彼を見返してやろうと、真優は必死に記憶を辿つた。

「えーっと……ミッション……」

そこは覚えていたのだ。慎也を窺うと、彼は感心したような表情をする。

「すごいな。それで？」

「……それだけです。あと……ロン……とか、リンとか……口にしていたように思うけど……」

「素晴らしい、惜しいな」

慎也は小さく笑う。

「笑わないでください。それで……教えてくれないんですか？」

「いまは……ごめん。教えられない」

「いまは……ですか？ それって、いずれは教えてもらえるつてことですか？」

「そうだな。いずれは……」

どうやら、いまはそれで納得するしかないようだった。でも……気になる。それに慎也の家で待つ

ている女性のことなど……

「本当にわたしが行つてもいいんですね？」

「どうして？」

「どうしてって……その……慎也さん、恋人ではないと言いましたけど……急に泊まってくれなんて頼める間柄というのは、かなり特別な相手としか思えないから」「特別な相手なんかじゃない。君が俺のところに安心して泊まれるよう、無理をきいてもらつたんだ」

慎也はきつぱりと言い、さらに続ける。

「おかしな誤解をさせないように」というのは、つまり自分たちは恋人同士ではないと説明するといふことだ……

その言葉に、なぜかショックを受けている自分がいて、真優は首を傾げた。  
おかしな誤解をさせないように」というのは、つまり自分たちは恋人同士ではないと説明するといふことで……

「真優？」

黙り込んでいたら、慎也が真優を窺うように話しかけてきた。

「そのひと、そんなに猫アレルギーがひどいんですか？」

真優は話題を変えた。

「ああ、ひどい。残りのやつらも、あまり動物と親しむタイプじゃない」  
残りのやつら？ あつ、そうか……

「まだ、ひとがいらつしやるんでしたね」

「今日はもういない。次に来るのは月曜だ」

それって、仕事関係のひとたち……なのかな？ さつき、お姉さんが引きこもつてばかりいるつて言ってたし……慎也さんの仕事は自宅でできる仕事なのかな？

「あ、あの……慎也さんって、どんなお仕事してるんですか？」

「どんな仕事してると思う？」

聞き返されて、真優は改めて運転している慎也を見つめた。

「そうですねぇ」

整った顔立ち、スリムな身体。髪は……ちょっと長いかな。

性格は、ほんのちょっとだけ俺様な感じかも。

「会社勤務の、サラリーマンじゃなさそうです」

「当たりだな」

楽しそうに返してきたが、慎也はそのまま口を閉じてしまう。

なんの仕事をしているのかもう一度聞こうとしたそのとき、車が停まつた。

「着いたぞ」

「こ、ここですか？」

洒落た外観のマンションを見上げ、真優は目を丸くした。

「さすがに一度に運ぶのは無理だな」

「ですね」

車に積まれている荷物を見て、真優は頷く。

「君は、自分の荷物を持っていくといい。俺は、まず、リンを連れていく」

真優は自分の荷物を取り出し、慎也はリンのケージを抱える。

エレベーターに乗り込み、真優は目の前にある慎也の背中を見つめた。

男のひとの背中なんて、社内で見慣れているのに……慎也さんの背中って、見ているだけでドキ

ドキする……それに、ちょっと触れてみたいかも。

そんなことを考えていると、ふいに慎也が振り返ってきて、真優はビクンと身を竦めた。

「荷物……うん？」 真優、どうした？

「えっ？ な、何がでしよう？」

「いや……」

詠しそうな眼差しを向けられ、目が泳いでしまう。

「君つて、動搖が手に取るようにわかるな」

「は、はいつ？」

「嘘、つけないだろ？」

そんな指摘を受け、返事に窮していると、エレベーターの扉が開いた。真優は会話が中断されたことにほっとしつつ、慎也のあとに続いた。

「荷物重くないか？」

振り返つて聞かれ、首を横に振る。

「大丈夫です。というか、わたしより、慎也さんのほうが重そうです。リンちゃんのケージ」

リンは眠つてしまつていてるようだ。慎也の姉と別れてから、気味が悪いほどおとなしくなつたり  
ンが、真優は逆に心配になつてくる。

「まあな。こいつは軽くはない。リンには食事制限をさせるべきだと思うんだが……」

「ノルウェージャンフォレストキャットは、大きくなるんですよ。リンちゃんは……女の子にして  
はかなり大きいんですけど」

「女の子じゃない」

「は、はいつ？ まさかリンちゃんって、男の子だつたんですか？ でも、名前が……」

「普段はリンつて呼んでるけど、本当は凛太郎っていうんだ。ちなみに、凛々しいの凛な」

「そ、そだつたんですか。なら、その大きさも納得かも」  
慎也が、あるドアの前で足を止めた。

「真優、インテラーフォン押してもらえるか？」

「ああ、はい」

右手に持っていた荷物を床に置き、真優は急いでインターフォンを押した。だが、応答がない。

「青井のやつ、何やつてんだ」

アオイさん？ 彼女の名前、アオイっていうのか？

そつか、慎也さんって、彼女のことも名前で呼んでるんだ。自分だけではないと知つて、なんだかシユンをしてしまう。

「真優、インターフォンを連打しろ」

苛立つた様子で慎也に指示され、真優は三回連打した。

「もつと！」

さらに言われ、慌てて押そうとすると、やつと返事が聞こえた。

「はーい、はい」

「青井、俺だ。遅いぞ。早く開けろ！」

「はーい」

するとドアが勢いよく開けられた。

「おつかえりなさーい。あなたくん……うつわわっ！」

甘え声が一転して、叫び声に変わった。

「な、なんで猫？」

「青井！ 落ち着け」

慎也がなだめたが、青井は女性とは思えぬガニ股で後ずさり、距離を取つた。

「ボス！ これ、どういう、ケツ、クシャン。クシュン、クッショーン」

「器用なくしゃみをするもんだな。青井」

「猫なんて連れて……ケツ、クション！ くるから……ハツ、ハツ、ハツクション！ ……でしょ

うがあ」

青井は身に着けているピンクのエプロンで顔を覆いながらくしゃみを繰り返し、鼻水を啜つてい。る。真優は気の毒になつてきた。このひとの猫アレルギーは、かなり重症のようだ。

「そこまでひどいとは思わなかつた」

「うう……さ、最悪だ。ぐすつ、ぐすつ。僕、もう帰らせて……ハツクション……もういますからね」

はいっ？ 僕？ いま、このひと、僕つて言った？

真優は戸惑いながら、ド派手なワンピースにピンクのエプロンをしている青井を見つめた。

整つた顔立ち。つやつやのストレートの長い髪だが……

「わかった。もう引つ込んでてくれ。部屋は片づいてるのか？」

「片づけたよ。まさか猫と一緒にご帰還きかんとはね。最悪！」

超不機嫌な声で怒鳴る。見た目はどこからどう見ても女性なのだが、声は男性のものとしか思え

ず、真優は困惑した。

「いい？ ふたりとも。猫はその部屋にさつきと入れて。奥に来る前に、シャワー浴びて着替えてきて。絶対そのままで来ないでよ。じゃないと、僕、このまま帰るからねつ！」

「僕……ね」

慎也が冷ややかに口にした。すると青井は、しまつたというように顔をしかめた。

「は、流行なんだよね。女の子が僕って言うのが、かわいいってさ。てへっ」

自分の頭を拳でコツンと小突き、小さく舌を出す。その仕草はかわいらしいのだが……

真優の戸惑いの視線を受けた青井は、「そ、そんじゃ、シャワー頼むよお」と早口で言うと、あつ

という間に姿を消した。

玄関先に立っていた真優は、慎也と目を合わせた。彼は気まずそうにしている。

君が……その……安心かなと思つてね。ここに泊まるのに、女の子がいたほうが……」「えっ、でも……」

「——白状する。青井は女じやない」

「ですよね」

「すまない」

頭を下げる慎也を見て、真優は噴き出した。

「笑つてくれるのか？ 怒つていない？」

「だつて……でも、アオイって、名前なんですか、それとも苗字？」

「苗字だ。青色の青に井戸の井。名前は康弘やすひろ」

青井康弘さんか……なんか女性の格好をしているから、まるでしつくりこない。「でも、綺麗なひとですね。女のわたしより何倍も」

「そんなことはない。いくら女に化けても、男は男だ」「あの……こんなこと言つていいのかわかりませんが……青井さん、女装が初めてのようには見えなかつたんですけど」

まさか慎也さん、青井さんにいつも女装させてるの？ そういう趣味があるとしたら、ショックかも。

「青井のために言つておくが、やつは女装趣味とかじやないぞ。ただ、仕事でちょっとな」

「は、はい？ 仕事？ 女装が？」

「ああ。それについてはあとで詳しく話す。まずはリンを部屋に運びたいんだが、いいか？」

「は、はい」

真優は少々ためらいつつも、靴を脱いで上がつた。

慎也は側にあるドアを開けて、真優がやつてくるのを待つ。

部屋は片づいていたが、いくつか荷物が残つていた。

「さすがにあの荷物全部は、運び出せなかつたか」

床にケージを下ろした慎也はベッドに近づき、掛布団をめくる。

「うん、シーツも替えてくれたみたいだな」

「あ、あの、ここつて青井さんの部屋だつたんですか？」

「まあ、あいつが泊まることがある」

「？」

慎也は入口とは別のドアに歩み寄り、振り返る。

「こつちは俺の部屋だ。ここは続き部屋になつてゐる。ちなみに鍵はついていない。でも、寝るときは、このドアの下にリンのケージを置いとくから、安心だろ?」

「そうします」

冗談っぽく言われ、真優は笑いながら冗談で返した。

「こつちがクローゼット。……うん、全部移動したな。真優、空になつてゐるから好きに使つてくれ」

「青井さん、色々と大変だったでしょうね」

「まあ……そうだな。あいつには、時間外手当を出しとく」

真優は、首を傾げた。

「まるで、慎也さんが青井さんを雇つてゐるみたいに聞こえますけど……」

「そういえば、青井さん、慎也さんのことをボスと呼んでいたつけ。」

「まあ、そんなことだ。それより、君、先にシャワーを浴びるといい。飯を食いながら、青井のくしゃみ攻撃を食らつたら、たまらないからな。君も腹が減つてゐるだろう?」

「あつ、そうだ。わたし、食料品を持つてきました。玄関先に置いたままなので、早く冷蔵庫に入れないと……」

「二週間も留守にすることになるからと、冷蔵庫の中のものを全部持つてきました。もちろん、『もしやし』のやつも。」

「シャワーを浴びない限り、キッチンには行けないぞ。……といえば足の怪我、大丈夫か?」

「大丈夫ですよ。いつたん包帯を外して、シャワーを浴びたら、また巻いておきます」

慎也は気がかりそうな顔をしつつも、頷く。心配してもらえることが嬉しい。

「君がシャワーを浴びてゐる間に、俺は残りの荷物を運んでくるとしよう」

「わかりました。急いで浴びてきますね」

真優は自分の荷物を詰めてあるキャリーバックに手をかけた。

「急がなくていい。あつ、それと……風呂場、鍵をかけておくように。青井が入つてくることはないだろうけど……一応」

「はい、します」

「それじゃ、俺は下に戻る。さつきも言つたけど、仕事のことはあとで説明するから」

そう言うと、慎也は急いで部屋を出ていった。

あとでか……青井さんの女装が仕事つてのが気になるな。それに暗号のことも。

後回しにされた謎に首を傾げながら着替えを取り出した真優は、部屋を出てハタと気づく。お風呂場つてどこ?

やれやれ、お風呂場がすぐに見つかってよかつた。